

都道府県別賞一等

みんなの未来を守る「保険」

広島県 広島県立三次中学校 一学年

工 佳穂

「これから保険会社の人が来るからね。」

そう母に言われた。知り合いが保険会社に勤めていることもあって家には定期的に保険会社の人が来ている。

正直に言うと、保険のことについて何も知らない私は少し前までは保険への印象が悪かった。それはなぜかと言うと保険を契約する前に勧誘をするため、その行為が悪質な業者が強引に契約を取り付けるためにうまく言って買わせるようなものだと小さいながらに勝手に思ってしまったからだ。しかし、その思いは、今考えると浅はかな思いだったことに気が付いた。保険の勧誘は、しっかりと理解をしてもらうため、安心をして人生を過ごしてもらうために必要なことだったのだ。

母も、保険会社に勤めている知り合いが家に来て、雑談を交わすようになるまでは保険のことについてあまり詳しくなかったし、知ろうとも思わなかったらしい。しかし、その知り合いが家に来るようになり保険に興味を持ち、

「保険に入ったんだよ。」なんてことを言っていた。

そんなある日、私たち家族は保険に助けられることになる。私が学校から帰るといつも冷静な母が少し騒がしく、焦っているような感じだった。その様子を見てただ事ではないと察知し、何があったのか聞いてみた。

「お父さんが入院したよ。」

と母は焦りながら言ってきた。いつも元気な父がなぜ入院なんかするんだと疑問に思っていたが、よくよく話を聞いてみると足を骨折したらしい。私の父は土木系の仕事についていて、その日も木を切っていた。その切った木がワイヤーが何か紐で引っ張っていたが、急に父の方に倒れてきて木が父に当たったのだ。そのせいで父は地面に叩きつけられ足を骨折してしまったのだ。骨折でも重症の方で入院をして手術をするようになった。父に命の危険がないことにホッとしたが、次第に父の足の状態への不安が胸を覆っていった。しかし、時間はかかるが手術をすれば歩けるようになることを聞き、ようやく安心することができた。

が、さらに心配なことが頭をよぎった。それはお金のことだ。「手術をするってお金がかかるんじゃない?」「当然その後も入院するからさらにお金がかかるんじゃない?」「入院するってことは働けないってことだから、収入がなくなるってこと?」様々な不安が浮かんできた。母に恐る恐る聞いてみると、

第62回中学生作文コンクール

「大丈夫、こんな時に備えて色々な保険に入っているし。」
と母は言った。そこから父は手術をし、入院し、治った後は働いている。私たちの生活は変わらず普通に学校へ通っている。保険に入っていることで生活の保障がされることに驚きと心強さを感じたことを今でも覚えている。この出来事から私の保険への印象は自分や家族の未来を守るものとなった。

私は保険の詳しいことはまだよくわからない。ただ、保険は生きていく上でとても大切なものであることはわかる。保険へ入ることが将来の自分も家族も救う。だから私は保険のことについてよく知り、将来母のように保険に入り、もしもの時に備えていきたいと思う。